

論文

早稲田大学図書館蔵「桂太郎旧蔵諸家書翰」について

——特に、山県有朋宛伊藤博文書翰をめぐって——

星 原 大 輔*

はじめに

千葉[1997:95]は、国立国会図書館憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」(以下、憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」と略)について

この史料群を見たことのある人なら、おかしいと感じたことがあると思う。なぜなら、残り方が不自然であるからである。数自体少数(851点)であるし、それ以上に彼の総理在任期の書翰がほとんどを占めている。

と指摘している。

桂太郎は弘化4年(1847)11月に長門で生まれた。桂は「明治時代を代表する軍人の一人」でもあり、かつ「明治後期から大正初年における代表的な政治家」でもあった[宇野2006:5]。

軍人としての桂に関して、大久保[1965:339]は明治軍制史上特筆すべき人物であると評価している。とりわけ、明治18年欧州の軍事視察から帰朝した後、桂は総務局長、陸軍次官に任じられ、陸軍省官制改革、兵制改革、教育軍政、師団編成、徴兵令改正など、陸軍の近代軍制の確立に大いに貢献した[徳富1917a:401-472]。

一方、政治家としての桂は、明治29年(1896)の台湾総督就任から始まる。その後、第3次伊

藤博文内閣、隈板内閣、第2次山県有朋内閣、第4次伊藤内閣で陸軍大臣を務めたのち、明治34年(1901)、明治41年(1908)、大正元年(1912)と、3度総理大臣に就任した。この間、義和団事件、日露戦争、韓国併合、大正政変など、桂は内外政における重要事件に関与している。

したがって、桂の関係史料群は、明治から大正初年における日本史研究において、欠くべからざる第1級史料であると言えよう。

会々、筆者は柴辻[1998]を繙いていた際、早稲田大学図書館特別資料室に「桂太郎旧蔵諸家書翰」⁽¹⁾(以下、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」と略)と題された史料群が所蔵されていることを知った。早速閲覧して検討したところ、間違いなく桂太郎旧蔵の史料であるとの確証を得た。そこで、本稿では、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」を学界に広く紹介するとともに、若干の考察を加えることにしたい。

1 桂太郎関係史料群の現状

1-1 『公爵桂太郎伝』と桂太郎関係史料

桂は大正2年(1913)10月10日に死去した。翌年、渋沢栄一を常務委員長とする故桂公爵記

*早稲田大学大学院社会科学研究所 博士後期課程3年(指導教員 島 善高)

念事業会が発足し、桂の伝記編纂などが記念事業として計画された。千葉[1997: 96-97]によると、伝記編纂は、桂と親交の深かった徳富蘇峰に委嘱され、徳富が山川端三・川崎三郎・栗屋関一・坂本辰之助に分担執筆させ、原稿を閲覧して訂正を指示する形で進められた。『公爵桂太郎伝』乾・坤2冊は大正6年(1917)2月1日に印刷され、5日に発刊された。

伝記編纂に当たっては、同4年(1915)1月11日、桂公爵伝記編纂所が開設され、まず伝記編纂の基となる史料の整理が行われた。そこで、桂家に保存されていた書翰・書類の筆写もしくは原史料(書翰・自筆覚書など)を、または伝記執筆に必要な資料を綴じ込んだ「伝記参考書」が作成された[千葉1997: 96-97]。この時、桂未亡人は伝記編纂のために一切の書類を提供し[徳富1935: 448]、刊行後に史料群は桂家に返還されたという[千葉1997: 95]。徳富[1917ab]には、総計128通の書翰が全文引用されている。そのうち、桂による差出書翰は78通、桂宛来翰は44通となっている⁽²⁾。

伝記編纂当時、桂と政治的関係の深かった山県有朋や平田東助らが生存しており、特に徳富は山県に「歳時を追て、桂公の書翰を整理し、之を提供」するよう依頼している[徳富1917a: 例言]。したがって、桂の差出書翰は桂家以外の諸家が所蔵していたものが用いられ、伝記編纂後、桂家に返還された史料群には基本的に含まれていなかったと考えてよいだろう⁽³⁾。そこで、引用されている桂宛来翰を憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」内の書翰・書類と照会してみると、44通のうち25通しか該当する史料は見当たらない。

この点からも憲政資料室蔵「桂太郎関係文

書」の「残り方が不自然」と感じるのは至極妥当で、憲政資料室以外に、桂太郎旧蔵の史料群が存在する可能性は高いと言い得るだろう。

1-2 桂太郎関係史料の憲政資料室への収蔵経緯

学習院大学[1993: 416-419]によると、桂太郎関係の主な史料群は、①国立国会図書館憲政資料室蔵「桂太郎文書」851点、②京都大学文学部博物館古文書室蔵「桂文書」29通、③横浜市立大学図書館蔵「桂太郎書翰」4点⁽⁴⁾、である。ただし、このうち②は戦国時代期の桂家史料であって、桂太郎に直接関連する史料ではない。

この他、宮内庁書陵部に「桂家文書」(5冊2組、明治33~45年)と「桂公爵家文書」(1冊2組、明治24~31年)が、また憲政資料室蔵「旧貴族院五十年史編纂収集文書」内に、「桂公爵家文書」(12冊、明治34~大正元年)が所蔵されている。

しかし、前者は宮内省臨時帝室編修局における『明治天皇紀』編纂に際しての写本であり、後者は編修官補として『明治天皇紀』編纂に従事した深谷博治氏が所蔵していた謄本の写本である。これらに謄写されている書翰はいずれも、憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」内にある史料の一部であるという[千葉1997: 96]。

したがって、憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」が現在、唯一桂太郎旧蔵の原史料を纏まった形で収めている史料群であると言えよう。千葉[1997: 96]によれば、これは以下のような経緯で購入された。

昭和26年、憲政資料室の開室早々、図書館当局より公文で桂家に交渉し、事務担当の大久保(引用者注: 利謙)氏が桂邸に出向いて、同室による憲政史

料収集の目的等を当主の桂広太郎氏に説明した。その際、所蔵している桂太郎文書「すべて」を頂きたいと申し込んだところ、広太郎氏はそれを承諾し、別室に案内して大きなトランクにつめた書類を見せて、「これだけです」と言った。それを憲政資料室に運んで整理した。

その後、昭和39年に古書展に出ていた伝記参考書8冊を購入して加え、現在の史料群のかたちになった[千葉1997: 96]。

以上から、千葉[1997: 96-97]は、「桂太郎死没直後状態→伝記編纂過程→桂家へ返却→憲政資料室」の順で検討した上で、桂太郎の関係史料の伝来について、3つの仮説を並立的に提示している。第一に、『公爵桂太郎伝』の編纂に従事した徳富らが、関係史料の一部のみしか桂家に返還しなかったこと。第二に、もともと桂死去の段階で現在の分しか残存していなかったこと。第三に、徳富らはすべて返還したが、臨時帝室編修局による史料調査までの間に、他の史料が散逸してしまったこと。

その後、伊藤[2004: 121-122]にも新史料群の記述はなく、関連論文も発表されていない。また『桂太郎自伝』の校註にもあたった宇野俊一の新著の主要参考史料にも新たな史料群は記されていない[宇野2006: 296]。したがって、桂太郎関係の一次史料として、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」はまだ学界では広く認知されていないと言って差支えないだろう。

2 早大図書館蔵「桂太郎旧蔵諸家書翰」の史料情報

2-1 伝来と概要

この史料群は、「桂太郎旧蔵諸家書翰」と墨筆で記された木箱2箱と和本3帙から成っている。

まず、和本3帙から説明しよう。

1帙は、「桂公爵伝記編纂所」用紙で綴られた、「大正4年4月調 諸家書翰目次」と題された和本である。同年1月11日に開設された同編纂所が作成したものであろう。これは、調査当時に所蔵されていた書翰の差出人名と、それぞれの書翰数が記されている。それによると、大正4年4月時点では、54名の来翰が計183通所蔵されていたようである。

残り2帙は、それぞれ「名家書翰 甲」「名家書翰 乙」と題された和本である。これらも「桂公爵伝記編纂所」用紙が使用されている。内容は、「諸家書翰目次」にある各書翰の謄本で、計54名の書翰が計116通謄写されている。「諸家書翰目次」と書翰数がかなり異なるのは、謄写されていないものがあるからである。とりわけ、山県有朋書翰は「諸家書翰目次」に70通と記されているけれども、1通も謄写されていない。なお、後述するが、この抄本が臨時帝室編修局で作成されており、その採集年月は「大正15年10月」となっている。したがって、「名家書翰」は大正4年1月から15年10月までの間に作成されたことになる。

一方、木箱2箱には、計43名による自筆書翰計156通が31軸の卷子装に仕立てられている。このうち、山県書翰以外にも、「名家書翰」2冊に謄写されていない書翰が4通存在する⁽⁵⁾。

以上の各書翰の中身を検討すると、「名家書翰」2冊に謄写されている書翰は、すべて巻物として現存する書翰のものである。したがって、これらはもともと一組の史料群であったと推断できる。

さて、この早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」は一体どの段階で桂家より散逸したのであろう

か。早大図書館のカード目録によると、昭和30年（1950）7月に古書店より購入し、早稲田大学図書館の所蔵となった。

和本が収められている無双帙には、1通の封筒も同付されている。封筒の宛名は桂公爵邸内の「長島新蔵」で、差出人は臨時帝室編修局事務取扱の「豊原資清」である。中身を取り出すと、臨時帝室編修局用紙に次のように記されている。

臨時帝室
編修局 第四一四號

昭和二年十一月四日

臨時帝室編修局事務取扱 豊原資清㊟

長島新蔵殿

明治天皇紀編修上、参考ノ為左記ノ御所蔵文書先般借覧致候処、閱了ニ付御返進致候、右御紀編修上、大ニ参考ト相成、感謝ノ至ニ有之候、茲ニ御挨拶申進候也

追テ、現品御査収ノ上、曩ニ差出候借用證書御返還相成度申添候

記

一、名家書翰甲、乙 式冊

長島新蔵は桂家の執事であり〔徳富1917b: 971〕、「記」にある「名家書翰甲、乙 式冊」とは、先述した通り、和本3帙のうちの2帙である。上記の送付状によれば、臨時帝室編修局には謄本である「名家書翰」のみを貸与したようで、桂宛山県書翰は「借覧」されていない可能性がある。「閱了」とあるように、臨時帝室編修局は、この「名家書翰」の謄本を大正15年10月に作成した⁽⁶⁾。ただし、こちらは抄録したものであって、31通のみが謄写されているにすぎない。以上から、昭和2年11月の時点では、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」はまだ桂家が所蔵していたと推測される。

したがって、憲政資料室が桂家の所蔵してい

る桂太郎文書「すべて」を購入したならば、大正5年の「桂家へ返却」から昭和26年の「憲政資料室購入」までの過程で、何らかの理由で散逸したのであろう。

さらに、「諸家書翰目次」、「名家書翰」、巻物31軸の書翰数に相違が見られる。謄本である「名家書翰」と比すれば、巻物に現存する、山県以外の書翰数が少ない。したがって、原本の書翰は「伝記編纂過程→桂家へ返却→憲政資料室」の過程で、数箇所に分散した可能性がある。

2-2 書翰類の内容

早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」は、木箱2箱にある巻物として現存している書翰と、和本2帙に謄写されている書翰を併せると、総計194通の桂宛書翰、第三者間書翰、桂自筆と思われる書翰が収められている。

まず、この史料群が桂太郎関係の一次史料であることを立証したい。先述したように、徳富〔1917ab〕に引用されている来翰43通のうち19通が憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」には存在しない。このうち、この早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」には、次頁の表にある引用来翰及び第3者書翰11通が収められている。したがって、『公爵桂太郎伝』編纂にあたって用いられた、桂太郎が旧蔵していた一次史料であると断定して間違いのないであろう。

その差出人の内訳は、山県有朋が73通ともっとも多い。憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」のものと併せると、山県書翰の総数は238通にも達する。山県と桂の政治的関係の濃密さが窺えよう。ついで、岩倉具定11通、徳大寺実則、井上馨8通、伊藤博文6通、青木周蔵5通。この他にも、有栖川宮、小松宮ら皇族のほか、井上

表 早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」にある『公爵桂太郎伝』引用の来翰及び第三者間書翰

	日付	差出人	受取人	掲載頁
1	明12. 11. 20	宍戸 璣	桂 太郎	乾389-390
2	明12. 12. 3	宍戸 璣	桂 太郎	乾390-391
3	明13. 1. 15	宍戸 璣	桂 太郎	乾391-392
4	明13. 6. 15	梶山 鼎	桂 太郎	乾393-394
5	明31. 10. 29	岩倉具定	桂 太郎	乾828-829
6	明31. 10. 23	黒田清隆	桂 太郎	乾830-831
7	明31. 10. 30	黒田清隆	西郷従道	乾831-832
8	明31. 10. 31	岩倉具定	桂 太郎	乾832-833
9	明31. 11. 6	岩倉具定	桂 太郎	乾834
10	明34. 5. 25	井上 馨	桂 太郎	乾972-973
11	明34. 5. 25	井上 馨	桂 太郎	乾973-974

毅、大山巖、黒田清隆、児玉源太郎、土方久元、平田東助、松方正義など、総計57名の諸氏による来翰が収められている⁽⁷⁾。詳細は末尾に付記した目録を参照されたい。

さて、年代推定の可能な書翰を年代順に整理してみると、大きく3つの時期に集中している。

第一に、明治12年から13年までである。明治11年に参謀本部が設置され、桂は参謀本部管西局長に任じられた。管西局長は中部地方以西の各鎮台参謀部の統括を担ったため、明治13年7月に伊勢亀山で行われた演習に関する書翰が見受けられる⁽⁸⁾。また管西局長の業務には「朝鮮より清国沿海を対象とする調査、作戦立案、地図作成など」があり、桂は「清国派出将校兵略上偵察心得」「清国派出将校心得」などを作成している[宇野2006: 32]。そのため、清国探索に関する書翰などが散見される⁽⁹⁾。

第二に、明治18年から23年までである。桂は明治14年の政変後、陸軍卿大山巖に「軍を統率

する将官を選抜して、ドイツ・フランスに派遣し、軍事演習を実地に見学して軍隊指揮の知識を研鑽する必要がある」と建言した。これを受けて、明治17年(1884)2月、各兵科並びに各専門科の将校が選抜され、大山が率いて欧州を視察することとなった。桂もその一員として、欧州各国を視察し、同18年1月に帰国した[宇野2006: 34-36]。帰国後、桂は5月に総務局長に補任され、翌年3月には陸軍次官に任じられた。そして、22年の帝国憲法制定まで「陸軍の大改革を一貫して担当し、とくに立憲体制への転換期に対応する陸軍の全面的な改革を推進し」た[宇野2006: 49]。したがって、師団司令部条例⁽¹⁰⁾や近衛編制⁽¹¹⁾など、軍政改革に関する山県書翰が多数見受けられる。

第三に、明治31年から33年までである。前述した通り、桂はこの間、4つの内閣で陸軍大臣を務めた。とりわけ、明治31年6月30日に成立した隈板内閣期の書翰は注目に値する。同内閣成立の際、明治天皇より陸相留任の勅諭もあったが、大隈首相に「陸海軍の軍備拡充計画を全面的に認める」という確約を得た上で、桂は陸相に留任した。しかし、旧進歩党系と旧自由党系による獵官運動の対立や文相尾崎行雄の共和演説事件などによって、隈板内閣は早々に瓦解した。この時、桂は閣内で倒閣運動を画策しており[宇野2006: 86-87]、山県からは「陸海両大臣者重大之責任を被尽、勸慮被為安候儀、第一之御覚悟と存候」と叱咤激励を受けていた⁽¹²⁾。このほか、連携していた黒田、西郷らの来翰が残っている⁽¹³⁾。

また、義和団事件関係の山県書翰が多数見られるものの特徴であろう。隈板内閣に次いで、明治30年11月に成立した第2次山県内閣でも、桂

は陸軍大臣を務めた。必要法案をほぼ成立させた山県は首相辞職を決意し、明治33年5月24日、明治天皇に辞意を内奏した。天皇は再三懇諭して留任を命じたが、山県は翻意しなかった。しかし後任問題が行き詰っていた最中、義和団事件が激化したため、山県は天皇の勅旨を受けて、しばらく首相職に留まって対応に当たることとなった〔宮内庁1973: 821-824〕。

義和団事件の際、山県内閣は欧州列強の反応に配慮を払っていた。イギリスが6月23日に増兵を要請してきた際にも、日清戦争後の三国干渉の体験があったため、各国の態度を確認した上で、政府は翌月6日に増兵の閣議決定を行っている〔鹿島1970: 179-185〕。この前後、山県が発信した書翰があり、山県が増兵派遣を「他日為サント欲スル目的ノ基礎ヲ堅牢ナラシムルハ唯此一態ニ帰スル」として積極的に取り組もうとしていたことが窺われる⁽⁴⁴⁾。

憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」内の書翰を年代順に整理すると、上記の時期のものが他に比すると極端に少なく、ほとんど欠落している。それ故に、書翰ごとに考察を更に深めることが必要であろう。

3 明治16年1月8日付山県宛伊藤書翰

3-1 伊藤の滞欧憲法調査

さて、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」のうち、興味深い書翰の一つ紹介したい。文末に付記した目録番号4-1の明治16年1月8日付の山県有朋宛伊藤博文書翰である⁽⁴⁵⁾。

伊藤が欧州で憲法調査を行った約1年5ヶ月の間に、日本内外在住の関係者に発信した書翰に関する最新研究として、鳥海〔2005〕がある。これによると、現在内容が判明している書翰類

は58通で、国内に原本が現存しているものは33通であるという。うち山県宛書翰は4通とされている〔鳥海2005: 114-116〕。ただし、この中に、上記の書翰は含まれていない。

伊藤の滞欧憲法調査については、清水〔1971〕、瀧井〔1999〕、坂本〔2002〕などに詳しい。これらの先行研究に依って、その経緯と意義を簡単にまとめてみたい。

伊藤は明治15年(1882)3月3日に欧州における憲法調査の勅命を受け、14日に横浜を出港し、5月16日、ベルリンに到着した〔清水1971: 25-26〕。早速、伊藤は19日、ベルリン大学教授であったグナイストに面会し、憲法講義の打ち合わせを行い、25日よりグナイストの弟子モッセによる講義が始まった〔清水1971: 43〕。

しかし、7月29日までに26回行われた、逐条的なモッセの講義は、青木周蔵の邦訳を介したこともあり、伊藤にとって満足し得る内容ではなかった。7月5日付井上馨宛書翰で「決シテ箇条ニ付其文意ヲ解スル位ニ而ハ其精神モ實際モ吞ミ込ミ候事ハ出来不申、学問上ノ分析ニ而其事柄ニ付論窮不仕而ハ只皮相ノ事ノミニ御座候、成丈其骨子ノ在ル所ヲ探求シ、幾分カ其功能ヲ得度ものと執心罷在候」と、失意の念を訴えている〔鳥海2005: 120-121〕。

しかし、シュタインとの出会いによって、こうした状況は大きな転機を迎える。伊藤は8月8日、ウィーンで初めて出合い、その3日後、岩倉具視に

独逸にて有名なるグナイスト、スタインの両師に就き国家組織の大体を了解する事を得て、皇室の基礎を固定し、大権不墜の大眼目は充分立候間、……実に英米仏の自由過激論者の著述而已を金科玉条の如く誤信し、殆ど国家を傾けんとするの勢は今日我国

の現状に御座候へ共、之を挽回するの道理と手段とを得候は、報国の赤心を貫徹するの時機に於て其功驗を現はすの大切な要具と存じ、心私かに死処を得るの心地仕、将来に向ひ相楽み居候事に御座候

と、その喜びを伝えている⁽⁴⁶⁾。伊藤は11月5日にウィーンを発つまで、シュタインから計17回にわたる講義を受けた。そこで、伊藤が「心私かに死処を得るの心地」と言わしめたものは何であろうか。

瀧井 [1999: 209] は、伊藤がシュタインの講義で学習したのは、憲法典を十全に機能させるための「国制」の問題であったと指摘している。シュタインの講義録にも「憲法ハ殆ント建国ノ制ヲ列掲スルー片ノ法ニ過」ぎないとあり [清水1971: 431]、また伊藤の書翰案に「如御承知憲法ハ大体之事而已ニ御坐候故、左程心力ヲ勞スル程之事も無之候」⁽⁴⁷⁾とあることから、伊藤が憲法典のみを重視していたわけではないことが窺知できよう。

講義内容は瀧井 [1999: 191-202] の論究に譲るが、シュタインの講義を受けた伊藤は、この「国制」について次のように理解した、と坂本 [2002: 225] は指摘している。それは、君主・行政・立法の三要素の均衡を前提に、自立的な行政部が国家活動の中心となる「行政国家」のイメージと、大学教育および資格任用試験制度に基づいた専門官僚制の形成である⁽⁴⁸⁾。

ベルリンに戻った伊藤は再びモッセの講義を受け始め、12月27日にはドイツ南部遊歴の途に就き、途中パリで後藤象二郎と会い、翌年1月5日にベルリンに到着した [瀧井1999: 176]。その3日後、伊藤は自身の所感を認めるべく筆を執ったのであった。

3-2 明治16年1月8日付の伊藤博文書翰

まず、少々長文に渉るけれども未紹介史料なので、明治16年1月8日付の山県宛伊藤書翰の全文を掲げる。

(巻封)「山縣盟兄 博文
密啓」

尊嫡伊三郎大学試験之儀、諸方へ照会セシ処、何方も如意不参候故、無試験ニ而帰国致度との事相談有之候故、本年俟帰朝前後可致発程候様仕度、必竟是迄入校候事無之故、イツレモ彼は面倒申立候趣、要スルニ名ヲ博スルニ不遇事ニシテ学問ノ浅深ニハ差迄関係有之間希、本人も類ニ帰心有之候、旁御不承知無之儀ニ御坐候ハ、右様取計度、外務卿江電報ヲ以帰朝ヲ命シ呉候様御一声可被下候、軍備云々ニ付、松方参議へ愚見及内陳置候故御一覽可被下候、内閣へハ差支無之候得共、他へハ漏洩不仕候様奉願候、議論ノ種ト相成事ヲ恐レ申候、軍備充実ノ事ハ如何様ノ御手段ニ有之候歟、難致推則候得共、海軍ハ勿論、陸兵之方も規律整頓ニ別段御注意有之度、器械之準備ハ勿論ニ御座候へ共、独逸兵之精神ヲ推込ム事肝要と奉存候、過日帰国之伊地知ハ頗評判者ニ而兵制之方ニは必ハ御用立候人物ナルヘシ、愚考ニ而独逸之士官ヲ八九名各箇ニ雇入レ、我軍隊ノ内へ交込ミ、其生国ト戦争スルノ外ハ戦時ニモ 天皇陛下之士官同様死命ヲ致スノ誓言ヲ為サシメ、独逸政府ニ関係セス、公然ト公告シテ自箇ノ望ヲ以テ募ニ應スル者ヲ採用シ、給料ハ高額ヲ要セス、退隠料ノ約束ヲ以テスレハ手輕ク都合克ク相整ヘシ、而シテ内ニ在テハ小学校ノ改正ヨリ民権臭キ書物ヲ除キ、兵籍ニ入ルノ後ハ新聞其外一切嚴重ノ取締リヲ為シ、政論杯ニ関与スルノ道ヲ断絶シテ、一途ニ兵力ハ天皇ノ指揮ニ随テ生死スル様、道德恩恵法制威權悉皆之ヲ統一スル完全ノ方法ナカルベカラス、而シテ兵人ニ榮譽ヲ充分与ヘ候様、形体精神共ニ並行セサル可カラス

独逸ノ三大美ト思惟スル者、兵制ノ整頓ト行政ノ規矩、学校ノ教方、是ナリ、此三大美事皆ナ皇帝ノ大權ヲ保護シ、併テ国家ノ安寧ヲ維持ス、憲法杯ハ左程之効力ハ無之候へ共、大学ノ講義ニ於テ憲法ヲ説明スルモ、君權ヲ主張シ、君主ヲ敬戴スルヲ説立チ候故、学者人ヲ導クノ際ニモ間接ニハ政府ヲ補賛ス

ル訳ニテ、大ニ人心ノ離反ヲ防歇スル者アリ、行政ノ規矩準繩整備スルヲ以テ議院ヤ新聞紙モ其虚ヲ窺フ事不能、官吏ハ一度官ニ就テ終身過罪ナケレハ放逐ノ恐ナク、安心ノ地ヲ占有シ、退隠料ノ設ケアルヲ以、妻子ヲ飢渴セシムルノ憂モナク、君恩ノ難有ニ感シテ自ラ皇室ヲ尊戴ス、前条ノ三美ナケレハ、ビス先生雖有力、豈ニ赫々ノ大功ヲ奏スルヲ得ンヤ、世外兄空齊兄へ別書ヲ認ムルノ暇ナシ、賢兄願クハ宜希御伝言可被下候、右勿々敬具

一月八日

明治16年1月8日付の伊藤書翰は、山県宛書翰以外に、大蔵卿松方正義宛⁹⁹、外務卿井上馨宛¹⁰⁰、妻梅子宛¹⁰¹の3通がある〔鳥海2005: 114-116〕。このうち、井上、松方、山県宛書翰の内容から推すと、伊藤は松方宛、山県宛、井上宛の順で、書翰を認めたようである¹⁰²。

まず、松方宛書翰では、ドイツ南部遊歴での体験談に触れたのち、軍備充実に伴う増税実施のため地方長官に勅諭¹⁰³が下されたことに賛意を示している。なぜなら、欧州の形勢は「属地政略再燃の景況」にあり、殊に「人種と宗教の異同」がある東洋は「累卵よりも危し」と、伊藤は推断していたからである。それ故に「軍備充実の事は我力の限りを尽くし、平素に不虞の警を為す」べきであると書き送っている。

順が逆になるが、次に井上宛書翰を見てみよう。井上は滞欧中の伊藤に、欧州各国の政府に対等条約の協定に同意するよう斡旋を委嘱した〔春畝1943: 344〕。これに対して、伊藤は、英仏両国は難しいが、「独逸は聊か助くるの内意ある」ようなので、一応交渉を試みるとの意を伝えている。ただし「法権」の一部回復は意の如くならないのは「判然」である、と伊藤は断定している。なぜなら、これは「道義より寧ろ宗教論」に関わる事柄であるからで、詳細は「松

方兄へ差送りたる書面」に書き記したので見て欲しいと、伊藤は書き送っている。

このように、伊藤の対外危機認識の根底には、「人種と宗教の異」なる文明の対立という視点があった。山県宛書翰では、まずドイツ公使館書記生であった山県の養嗣子伊三郎¹⁰⁴の帰国の件を記し、ついで「軍備」に関して述べている。ここでも「軍備云々ニ付、松方参議へ愚見及内陳置候」と、松方宛書翰の一覧を山県に促している。伊藤は自身の対外認識を政府の主要メンバーに共有されることを望んでいたのではないだろうか。

さて、山県宛書翰で伊藤は続けて、「軍備充実」以上に「海軍ハ勿論、陸兵之方モ規律整頓」に注意すべきであると述べている。そのためには「独逸兵之精神ヲ推込ム事」が肝要で、「独逸之士官ヲ八九名各箇ニ雇入レ、我軍隊ノ内へ交込」むことを、さらに「小学校ノ改正ヨリ民権臭キ書物ヲ」排除し、入隊後は「新聞其外一切厳重ノ取締」って「政論杯ニ関与スルノ道ヲ断絶」するよう提案している。明治15年の福島事件など、激化する自由民権運動を意識した方策であろうか。

こうして、伊藤は「天皇ノ指揮ニ随テ生死スル様、道德恩恵法制威権悉皆、之ヲ統一」させ、「兵人ニ栄誉ヲ充分与ヘ候様、形体精神共ニ並行」する軍制を整えるべきであると提言する。伊藤がドイツの軍隊や軍制に強い関心を寄せていた様が窺知されよう。

3-3 「独逸ノ三大美」

伊藤が「規律整頓」など軍事に関する意見を山県に呈したのには理由があった。それは、

独逸ノ三大美ト思惟スル者、兵制ノ整頓ト行政ノ規矩、学校ノ教方、是ナリ、此三大美事皆ナ皇帝ノ大権ヲ保護シ、併テ国家ノ安寧ヲ維持ス、……前条ノ三美ナケレハ、ビス先生〔引用者註：ビスマルク〕雖有力、豈ニ赫々ノ大功ヲ奏スルヲ得ンヤ

憲法杯ハ左程之効力ハ無之候ヘ共、大学ノ講義ニ於テ憲法ヲ説明スルモ、君権ヲ主張シ、君主ヲ敬戴スルヲ説立チ候故、学者人ヲ導クノ際ニモ間接ニハ政府ヲ補翼スル訳ニテ、大ニ人心ノ離反ヲ防歟スル者アリ

という感懷を伊藤が抱いたからである。

シュタインが説いた立憲制とは、国家の自己意識を具現化する機関としての君主と、国家の意思を形成する立法部と、国家の行為を司る行政部が、それぞれ自立しながら、互いに規律して調和を形成する政治体制である〔瀧井1999: 193〕。しかし、シュタインは、三要素のうち、行政部を「邦国ノ生命ヲ主持スルノ機関」として特に力点を置いていたが、伊藤はその教えを「換骨奪胎」して、漸進的に議会政治を定着させていく、立法部に力点を置いた独自の国家ビジョンを描いていた〔瀧井2003: 128〕。

それ故、ビスマルクが議会運営に苦しんでいた様を見ていた伊藤は〔鳥海2005: 120-122〕、多民族国家を束ねるオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの姿から、「国民精神という内的な支柱」と「議会在破綻した際にそれをいわば高権的に救済する立憲君主の存在」の必要性を、強く認識したという〔瀧井2003: 125-128〕。

シュタイン講義を受け、独自の国家ビジョンを持った伊藤の眼には、「兵制ノ整頓」「行政ノ規矩」「学校ノ教方」が、新興国家ドイツに「皇帝ノ大権」と「国家ノ安寧」の保護を齎し、国家隆盛の起因になっていると映ったのであろう。

では、伊藤はそれぞれの効能をどう理解していたのであろうか。「兵制ノ整頓」については前述以上の記述はない。「学校ノ教方」に関しては、

と説明している。瀧井〔1999: 205-207〕は、シュタイン講義によって、伊藤は「将来我国の治安を図るの目的を以て教育の基礎を定むる」と、専門官僚の育成という目的から大学を国家機関として整備するという文教政策の展望を獲得したと指摘されている。しかし、この山県書翰からは、「国民精神の涵養」という視点も有していたことが推測されよう。

さらに、伊藤は「行政ノ規矩」の機能については、次のように整理している。第一に、「行政ノ規矩準繩」の整備によって、議院や新聞紙に虚を衝かれることを防いでいること。第二に、終身官制を採用して「安心ノ地ヲ」与え、「退隱料」を設けることで、官僚が「君恩ノ難有ニ感シテ自ラ皇室ヲ尊戴」していること。

明治16年(1883) 8月4日に帰国した伊藤は、宮内卿、初代内閣総理大臣などを務め、ここに示した「行政ノ規矩」「学校ノ教方」を確立すべく、制度改革に取り組んでいる。この山県宛書翰はドイツでの憲法調査を経た伊藤が、当時描いていた国家ビジョンの一端が窺われる一史料であろう。

ところで、なぜこの書翰が桂太郎旧蔵の史料群に含まれているのであろうか。今のところ、その由来を解く史料的根拠は見当たらない。明治16年1月、受取人の山県と、旧蔵者の桂は国内にいた。明治22年の憲法発布に向けて、陸軍も軍制改革の必要性に迫られていた。そんな折、伊藤書翰に「独逸ノ三大美」の一つに「兵

制ノ整頓」が列挙されていたのを見た山県が、同郷の後輩でもあり、かつ部下でもある桂に回覧したとは考えられないだろうか。さらに、想像を逞しくすれば、かつて明治3年から6年まで、8年から11年まで、2度にわたってドイツで軍制研究に励んだ桂は、この書翰を目にして、陸軍卿大山に欧州視察を建言しようとする意をより強くしたのではないだろうか。

おわりに

以上、本文では、これまで学界には知られてこなかった、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」が桂太郎旧蔵の一次史料であることを立証し、その史料情報や書翰類の内容を紹介した。詳細は論末に付記した目録を参照されたい。

この史料群には、前述したとおり、憲政資料室蔵「桂太郎関係文書」内にはない、明治10年代前期、後期から20年代前期、30年代前期の書翰が多数収められている。その一例が、明治16年1月8日付の山県宛伊藤書翰である。

この新史料群は、桂太郎、明治軍制史、憲政史など、今後の関連研究に裨益するところが大きいであろう。今後、早大図書館蔵「桂太郎旧蔵書翰」収蔵の書翰、特に桂宛山県書翰を翻刻し、内容を検討して論文としてまとめた。

〔投稿受理日2006. 5. 26／掲載決定日2006. 6. 8〕

注

- (1) 請求番号は、「チ6-3917」である。
- (2) 電報類は除く。なお残り6通は第三者間の書翰である。
- (3) 例えば、徳富 [1917a: 817-819] に引用されている、明治31年10月23日付の山県有朋宛桂太郎書翰は、尚友 [2005: 308-309] の「桂太郎書翰5」に所収されている。
- (4) 同館 HP [<http://opac.yokohama-cu.ac.jp/>] に

よると、4通すべて伊藤博文宛桂書翰である。

- (5) 目録の「備考」欄に“△”とある書翰である。明治23年12月6日付、桂宛青木周蔵書翰（目録1-1）、12月26日付、山県宛柏村信書翰（同16-1）、明治13年1月26日付、大山巖宛久保田貫一書翰（同22-1）、明治18年付、桂宛徳大寺実則書翰（同39-2）。
- (6) 宮内庁書陵部蔵「名家書翰」（目録番号「明865」）。「台本出处」は「長島新蔵所有」とあり、「採集人名」は臨時帝室編修官の渡邊幾治郎と上野竹次郎となっている。
- (7) 第三者間の書翰を含む。
- (8) 明治13年5月3日付、桂宛山県書翰（目録54-9）、同年5月22日付、同書翰（同54-10）、同年5月27日付、同書翰（同54-11）。
- (9) 明治13年8月11日付、桂宛山県書翰（目録54-72）の他、同年6月15日付、桂宛梶山鼎助書翰（同15-1）、12年11月20日付、桂宛穴戸璣書翰（同33-1）、同年12月3日付、同書翰（同33-2）など。
- (10) 明治21年4月23日付、桂宛山県書翰（目録54-24）。
- (11) 4月25日付、桂宛山県書翰（目録54-25）。
- (12) 明治31年10月24日付、桂宛山県書翰（目録54-47）。
- (13) 明治31年10月23日付、桂宛黒田清隆書翰（目録23-1）、同年同月30日付、同上書翰（同23-3）、同日付、西郷従道宛同上書翰（同23-2）、桂宛西郷書翰（同29-1）など。
- (14) 明治33年6月30日付、桂宛山県書翰（目録番号54-54）。
- (15) 渡邊幾治郎が長谷川如是閑との対談で「最近早稲田で手に入れた沢山の資料のうちに、伊藤が16年に露国に行った時に山県にあたえた手紙がある」と語っているのは、これであろう [長谷川1951: 120]。
- (16) 明治15年8月11日付、岩倉具視宛伊藤書翰 [末松1912: 129-130]。
- (17) 明治15年11月下旬または12月初め付、柳原前光宛伊藤書翰 [島海2005: 124-126]。
- (18) 同上書翰に「……仮令如何様之好憲法ヲ設置スルモ好議會ヲ開設スルモ、施治ノ善良ナラサル時ハ其成迹見ル可キ者ナキハ論ヲ俟タス、施治ノ善良ナランヲ欲スル時ハ先其組織準繩ヲ確定セサル

可カラス。組織準繩中尤モ不可欠ものは宰相之職権責任、官衙之構成、官吏之遵法ス可キ規律及其進退任免、試験之方法、退隱優待之定規等ニシテ……、由之觀之、政府の組織行政ヲ確立スル、実ニ一大要目ナリ」とある〔鳥海2005: 124-125〕。

- (19) 明治16年1月8日付、松方正義宛伊藤書翰〔春畝1940: 335-339〕。
- (20) 同日付、井上馨宛伊藤書翰〔井上2002: 4-5〕。
- (21) 同日付、伊藤梅子宛伊藤書翰。〔鳥海2005: 117〕
によれば、憲政資料室蔵「伊藤博文文書」書類の部。
- (22) 松方宛書翰には山県宛、井上宛書翰に関する記述はないが、山県宛書翰には「軍備云々ニ付、松方参議へ愚見及内陳置候」と、松方宛書翰に触れている。そして、井上宛書翰には「松方兄へ差送るたる書面」「山県伊三郎帰朝の事山県へ申遣置候」と、松方宛、山県宛書翰について言及している。したがって、松方⇒山県⇒井上の順が妥当であろう。
- (23) 明治15年11月24日、地方長官に下された勅諭は次の通り。「朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ国家ノ長計ヲ慮リ字内ノ大勢ヲ通觀シテ戎備ノ益皇張スヘキコトヲ惟フ、茲ニ廷臣ト謀リ緩急ヲ酌量シ時ニ措クノ宜キヲ定ム、爾等地方ノ任ニ居ル、朕カ意ヲ奉体シテ施行愆ルコト勿レ」〔宮内省1971: 820-821〕。
- (24) 山県伊三郎は明治13年3月にドイツベルリン公使館在勤を命じられて赴任。明治15年12月7日に帰国を命じられた〔徳富1927: 45-47〕。

参考文献

- 伊藤隆、季武嘉也編。2004『近現代日本人物史料情報辞典』吉川弘文館。455pp.
- 井上馨関係文書購読会。2002「資料紹介『井上馨関係文書』所収伊藤博文書翰翻刻—明治15年3月から明治26年4月まで」国立国会図書館主題情報部参考企画課編『参考書誌研究』56。国立国会図書館。1-32pp.
- 宇野俊一。2006『桂太郎』吉川弘文館。300pp.
- 大久保利謙。1965「桂太郎と日本陸軍の誕生」『中央公論』80(8)。333-339pp.
- 学習院大学史料館編集。1993『旧華族家史料所在調査報告書: 本編1』学習院大学史料館。503pp.
- 鹿島平和研究所編。1970『日本外交史: 5』鹿島

- 研究所出版会。368pp.+20pp.
- 宮内庁。1971『明治天皇紀: 第5』吉川弘文館。852pp.
- 1973『明治天皇紀: 第9』吉川弘文館。947pp.
- 坂本一登。2002「伊藤博文と『行政国家』の発見」沼田哲編『明治天皇と政治家群像: 近代国家形成の推進者たち』吉川弘文館。194-234pp.
- 柴辻俊六編。1998『早稲田文庫の古文書解題』岩田書院。255pp.+40pp.
- 清水伸。1971『明治憲法制定史: 上』原書房。6pp.+560pp.
- 尚友倶楽部山県有朋関係文書編纂委員会編。2005『山県有朋関係文書: 1』山川出版社。408pp.
- 末松謙澄。1912「伊藤公の欧州に於ける憲法取調顛末」国家学会事務所『国家学会雑誌』26(12)。有斐閣。125-136pp.
- 春畝公追頒会。1940『伊藤博文伝。中巻』春畝公追頒会。図版13枚+1059pp.
- 尚友倶楽部山県有朋関係文書編纂委員会編。2005『山県有朋関係文書。1』山川出版社。408pp.
- 瀧井一博。1999『ドイツ国家学と明治国制: シュタイン国家学の軌跡』ミネルヴァ書房。350pp.
- 2003『文明史のなかの明治憲法: この国のかたちと西洋体験』講談社。230pp.
- 徳富猪一郎編述。1917a『公爵桂太郎伝。乾巻』故桂公爵記念事業会。図版26枚+1131pp.
- 編述。1917b『公爵桂太郎伝。坤巻』故桂公爵記念事業会。図版26枚+61pp.+1051pp.
- 編述。1929『素空山県公伝』山県公爵伝記編纂会。図版39枚+64 pp.+716pp.
- 1935『蘇峰自伝』中央公論。図版23枚+716 pp.+10pp.
- 鳥海靖。2005「伊藤博文の立憲政治調査」鳥海靖編『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館。112-140pp.
- 千葉功。1997「『公爵桂太郎伝』と「桂太郎関係文書」」『日本歴史』591。吉川弘文館。95-97pp.
- 長谷川如是閑他。1951「近代文明史上における大隈重信」早稲田大学大隈研究室編『大隈研究』7。早稲田大学大隈記念社会科学研究所。102-129pp.

桂太郎旧蔵諸家書翰目録（請求番号：チ6-3917）

[凡例]

- 一 配列は、差出人50音順（第三者書翰も含）。
- 一 「卷子」欄の“卷□”は「巻物の表紙に付されている番号」を、枝番“-□”は「巻頭からの貼付の順番」を表している。例えば，“卷1-1”は“1”と表記された巻物の1番目に貼付されている書翰である。なお，“——”は原本が存在せず，「名家書翰」にのみ謄写が存在している書翰である。
- 一 「備考」欄の“○”は臨時帝室編修局で謄写されていた書翰を，“△”は「名家書翰」に謄写されていない書翰を意味する。

番号	差出人	受取人	日付	内 容	卷子	備考
1	1 青木周蔵	桂 太郎	明23.12.6	(独文)	卷1-1	△
	2 青木周蔵	桂 太郎	明 . 4.23	次郎及白河城跡買入	卷1-2	——
	3 青木周蔵	桂 太郎	明 . 6.15	乃木川上両少将帰京其他	卷1-3	——
	4 青木周蔵	桂 太郎	明 . . 8	枉駕希望	卷1-4	——
	5 青木周蔵	桂 太郎	明 . .14	リホンホルム等招待	卷1-5	——
2	1 有栖川熾仁親王	桂 太郎	明19.12.19	陸軍大学校へ参校	——	——
3	1 石部誠中	桂 太郎	明8.4.8	再度の洋行に付種々相談	卷2-1	——
4	1 伊藤博文	山県有朋	明16.1.8	山県伊三郎氏大学試験，軍備充実及独乙仕官 傭聘	卷2-2	○
	2 伊藤博文	桂 太郎	明18.5.1	吉田庫三就職依頼	卷2-3	——
	3 伊藤博文	桂 太郎	明 .12.13	来訪時間打合	卷3-1	——
	4 伊藤博文	桂 太郎	明 . .26	来邸希望	卷3-2	——
	5 伊藤博文	桂 太郎	明31.2.24	乃木総督進退	卷3-3	○
	6 伊藤博文	桂 太郎	明 . 6.6	居留地に付其他	卷3-4	——
5	1 伊東巳代治	桂 太郎	明36.3.6	招待参上，西本願寺一件其他，法律案，政友 会員の反抗	卷4-1	○
6	1 井上 馨	桂 太郎	明 .12.3	至急来邸	卷4-2	——
	2 井上 馨	桂 太郎	明 . .18	至急来邸	卷4-3	——
	3 井上 馨	桂 太郎	明 . 3.23	常盤家へ招待	卷4-4	——
	4 井上 馨	桂 太郎	明 . 2.7	炭山築港	卷5-1	——
	5 井上 馨	桂 太郎	明34.5.25	第一次桂内閣組織（其一）	卷5-2	○
	6 井上 馨	桂 太郎	明34.5.25	第一次桂内閣組織（其二）	卷5-3	——
	7 井上 馨	桂 太郎	明 . 9.26	都築馨六身上に付依頼	卷6-1	——
	8 井上 馨	桂 太郎	明 .12.13	至急来邸	——	——
7	1 井上 毅	桂 太郎	明21.5.26	兵役令に関し協議	卷6-2	——
8	1 井上 勝	桂 太郎	明43.4.1	取極の日通知	卷6-3	——
9	1 岩倉具定	桂 太郎	明 .10.27	参着希望	卷6-4	——
	2 岩倉具定	桂 太郎	明31.10.29	山県元帥呼戻	卷6-5	——
	3 岩倉具定	桂 太郎	明31.10.29	板垣伯辞職	卷6-6	○
	4 岩倉具定	桂 太郎	明 .10.30	面会の日時打合	卷7-1	——
	5 岩倉具定	桂 太郎	明31.10.31	大隈伯辞表奉呈其他	卷7-2	○
	6 岩倉具定	桂 太郎	明 .11.2	日野大尉転職	卷7-3	——
	7 岩倉具定	桂 太郎	明31.11.6	山県内閣成立前御辰憂	卷7-4	○

番号	差出人	受取人	日付	内 容	卷子	備考	
9	8	岩倉具定	桂 太郎	明 . 12. 24	来訪時間打合	巻8-1	—
	9	岩倉具定	桂 太郎	明 . 11. 11	英国大使其他の叙勲	巻8-2	—
	10	岩倉具定	桂 太郎	明31. 1. 17	坪井航三病氣	巻8-3	—
	11	岩倉具定	桂 太郎	明 . 12. 12	面会時間問合	巻8-4	—
10	1	大島義昌	桂 太郎	明27. 6. 8	出征に付心事開陳	巻9-1	—
	2	大島義昌	桂 太郎	明42. 1. 17	長女結婚に付相談	巻9-2	—
	3	大島義昌 初子	桂 太郎	大2. 3. 24	結婚披露に参上	巻9-3	—
11	1	大谷光端	桂 太郎	明38. 3. 13	帰山挨拶の書状	巻9-4	—
12	1	大山 巖	桂 太郎	明13. 3. 17	在英久保田貫一の書翰送付	巻9-5	—
	2	大山 巖	桂 太郎	明28. 7. 27	凱旋祝賀, 三好大佐	巻9-7	—
	3	大山 巖	桂 太郎	明25. 8. 15	再び陸相拝命	—	○
13	1	小川又次	桂 太郎	明27. 8. 30	出征に付心事開陳	巻10-1	○
14	1	小沢武雄	桂 太郎	明18. 10. 2	生徒副長採用	巻10-2	—
15	1	梶山鼎助	桂 太郎	明13. 6. 15	北京よりの諸情報	巻10-3	—
16	1	柏村 信	山県有朋	明 . 12. 26	来示の件承知	巻20-6	△
17	1	勝田主計	桂 太郎	明 . 3. 13	藤本救済	—	—
18	1	金杉英五郎	桂 太郎	明44. 5. 9	昇爵の祝詞	巻10-4	—
19	1	樺山資紀	桂 太郎	明 . 3. 17	清国兵備略送与謝意	巻10-5	—
20	1	川上操六	土屋九蔵	明 . 12. 15	地価査定其他	巻10-6	—
21	1	北畠治房	桂家執事	明 . 1. 15	面会の日時問合せ	巻10-7	—
22	1	久保田貫一	大山 巖	明13. 1. 26	(12-1 同封書翰カ)	巻9-6	△
23	1	黒田清隆	桂 太郎	明31. 10. 23	隈板内閣に就き憂慮	巻11-1	○
	2	黒田清隆	西郷従道	明31. 10. 30	(23-3 同封書翰カ)	巻11-2	○
	3	黒田清隆	桂 太郎	明31. 10. 30	西郷侯宛書翰送付	巻11-3	○
	4	黒田清隆	桂 太郎	明 . 4. 30	午餐会招待状	巻11-4	—
24	1	児玉源太郎	桂 太郎	明 . 5. 20	三好監軍帰京日時	—	—
	2	児玉源太郎	桂 太郎	明23. 7. 8	乃木氏搜索	—	—
25	1	近衛篤磨	桂 太郎	明35. 12. 22	地租問題調停事情政局に処する意見	巻11-5	○
26	1	小松彰仁親王	桂 太郎	明 . 11. 24	大生大佐身上依頼	—	—
27	1	小松原英太郎	桂 太郎	明 . 6. 18	教科書委員に対し談話	巻12-1	—
28	1	西園寺公望	桂 太郎	明43. 4. 2	招待に参上	—	—
29	1	西郷従道	桂 太郎	明33. 9. 25	垂示了承	巻12-2	○
30	1	佐久間左馬太	青山	明23. 4. 24	軍隊の電燈使用	巻12-3	—
31	1	三条実美	桂 太郎	明 . 1. 7	来邸希望	—	—
32	1	滋野清彦	桂 太郎	明16. 6. 24	林氏転職に付意見開陳	巻13-1	—
33	1	宍戸 璣	桂 太郎	明12. 11. 20	滞京中の謝意及杉山生依頼	—	—
	2	宍戸 璣	桂 太郎	明12. 12. 3	杉山生	—	—
	3	宍戸 璣	桂 太郎	明13. 1. 15	陸軍生徒取締其他	—	—
34	1	杉孫七郎	桂 太郎	明 . 3. 5	御途筋略図差廻依頼	巻13-2	○
	2	杉孫七郎	桂 太郎	明 . 3. 31	行幸御途筋	巻13-3	○
	3	杉孫七郎	桂 太郎	明 . 4. 26	陸軍大学校建設地	巻13-4	○
	4	杉孫七郎	桂 太郎	明 . 8. 20	陸軍病院移転後の地所	巻14-1	○

番号		差出人	受取人	日付	内 容	卷子	備考
34	5	杉孫七郎	桂 太郎	明21. 9. 24	長女病氣の見舞	巻14- 2	—
	6	杉孫七郎	桂 太郎	明28. 6. 26	凱旋祝賀の書状	巻14- 3	—
35	1	曾根荒助	桂 太郎	明22. 12. 18	案内時刻参上	巻14- 4	—
	2	曾根荒助	桂 太郎	明 . 4. 28	巴里よりの書面	巻14- 5	—
	3	曾根荒助	桂 太郎	明 . . 22	晚餐会諾否返事	—	—
36	1	田中不二麿	桂 太郎	明33. 6. 16	水野遼昇勲礼状	巻14- 7	—
37	1	田中光顕	桂 太郎	明 . 3. 26	独逸公使館夜会へ同行依頼	巻14- 6	—
	2	田中光顕	桂 太郎	明 . 8. 22	福島少将	—	—
38	1	寺内正毅	桂 太郎	明37. 11. 27	招待不参	巻15- 1	—
	2	寺内正毅		明33. 7. 22	北清事変に付聯合軍の作戦（電報）	—	○
39	1	徳大寺実則	桂 太郎	明 . 8. 4	佐藤正身上	巻15- 2	○
	2	徳大寺実則	桂 太郎	明18. .	陸軍武官進級令中改正案	巻15- 3	△
	3	徳大寺実則	桂 太郎	明31. 9. 6	尾崎文相参内	巻15- 4	○
	4	徳大寺実則	桂 太郎	明31. 9. 7	尾崎文相進退伺	巻15- 5	○
	5	徳大寺実則	桂 太郎	明31. 11. 10	演習地出張御裁行	巻15- 6	—
	6	徳大寺実則	桂 太郎	明 . 7. 14	参謀長へ内命伝達	巻15- 7	—
	7	徳大寺実則	桂 太郎	明32. 10. 24	上奏順序過誤進退伺	巻16- 1	○
	8	徳大寺実則	桂 太郎	明 . 5. 7	田村大佐拝謁	巻16- 2	—
	9	徳大寺実則	桂 太郎	明 . 12. 12	来邸希望	巻16- 3	—
40	1	鳥尾小弥太	桂 太郎	明37. 4. 26	神武太平策配布	巻16- 4	○
41	1	野村 靖	桂 太郎	明22. 6. 27	法律案に付意見開陳	—	○
	2	野村 靖	桂 太郎	明22. 10. 12	内閣紛擾	—	○
	3	野村 靖	桂 太郎	明23. 7. 4	67条の会議について	—	○
	4	野村 靖	桂 太郎	明27. 5. 20	算用相済云々	—	○
42	1	長谷場純孝	桂 太郎	明 . 6. 17	揮毫出来謝礼	—	○
43	1	土方久元	桂 太郎	明 . 2. 16	内話の事見合	—	○
	2	土方久元	桂 太郎	明 . 10. 20	久明身上に付依頼	—	—
	3	土方久元	桂 太郎	明 . 10. 31	久明留学決定謝意	—	—
44	1	平岡定太郎	桂 太郎	明43. 2. 5	予算分科会終了謝意	巻16- 5	—
45	1	平田東助	桂 太郎	明 . 3. 14	病氣引籠、貴族院操縦其他	巻17- 1	○
	2	平田東助	桂 太郎	明 . 6. 18	文部大臣	巻17- 2	—
46	1	星 亨	桂 太郎	明33. 6. 14	築港協議員人撰依頼	巻17- 3	—
47	1	堀江芳助	桂 太郎	明 . 7. 23	近日参上	巻17- 4	—
48	1	牧野伸顕	桂 太郎	明43. 1. 21	題字揮毫依頼	—	—
49	1	松方正義	桂 太郎	明 . 4. 29	横浜税関拡張工事に就いて	—	—
	2	松方正義	桂 大臣	明 . 9. 7	来邸希望	—	—
50	1	三浦梧楼	桂 太郎	大2. 2. 2	来意拝承昇名云々	巻17- 5	—
51	1	三好重臣	桂 太郎	明 . 7. 4	児玉少将帰京其他	—	—
	2	三好重臣	桂 太郎	明 . 7. 9	児玉少将書翰送附	—	—
	3	三好重臣	桂 太郎	明 . 7. 9	児玉少将帰京に付未諾	—	—
	4	三好重臣	桂 太郎	明27. 6. 5	隣邦の変動云々	—	—
52	1	三好退蔵	桂 太郎	明25. 3. 5	夫人媒介	巻17- 6	—
53	1	森 有礼	桂 太郎	明21. 4. 17	徴兵令改正草案内覧	巻17- 7	—

番号	差出人	受取人	日付	内 容	卷子	備考
54	1	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 21	大阪鎮台意見	巻18- 1 △
	2	山県有朋	桂 太郎	明 . 8. 16	来邸依頼	巻18- 2 △
	3	山県有朋	桂 太郎	明 . 12. 2	憲兵条例の改正草案の件	巻18- 3 △
	4	山県有朋	桂 太郎	明 . 2. 28	清国派遣軍艦の搭乗武官	巻18- 4 △
	5	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 7	鎮台兵条例草案に付き来邸依頼	巻18- 5 △
	6	山県有朋	桂 太郎	明 . 4. 6	陸軍章程	巻18- 7 △
	7	山県有朋	桂 太郎	年月日不明	四日市近傍の実地演習	巻18- 8 △
	8	山県有朋	桂 太郎	明 . 4. 17	陸軍章程	巻18- 9 △
	9	山県有朋	桂 太郎 堀江芳助	明13. 5. 3	亀山における演習手続書と審判官人員以下人名	巻19- 1 △
	10	山県有朋	桂 太郎 堀江芳助	明13. 5. 22	人馬表編成の件	巻19- 2 △
	11	山県有朋	桂 太郎	明13. 5. 27	供奉人員に付き来邸依頼	巻19- 3 △
	12	山県有朋	桂 太郎	明13. 8. 19	戦略書壱通の返却の確認	巻19- 4 △
	13	山県有朋	桂 太郎	明 . 9. 15	山田への通知遅延の通知	巻19- 5 △
	14	山県有朋	桂 太郎	明 . 9. 15	京攝間云々の事実相違	巻19- 6 △
	15	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 20	出征概則草稿・軍医事務章程	巻19- 7 △
	16	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 13	訓条の清書の差出の件	巻19- 8 △
	17	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 3	内閣への出頭依頼	巻19- 9 △
	18	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 4	香港発郵船の横浜到着次第報知するよう依頼	巻19-10 △
	19	山県有朋	桂 太郎	明16. 9. 5	電報案の返却について	巻20- 1 △
	20	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 22	独逸公使館夜会へ名刺投入依頼	巻20- 2 △
	21	山県有朋	桂 太郎	明22. 10. 25	臨時総理大臣の今日発表	巻20- 3 △
	22	山県有朋	桂 太郎	明 . 11. 25	来訪依頼	巻20- 4 △
	23	山県有朋	桂 太郎	明 . 12. 16	山県少佐身上	巻20- 5 △
	24	山県有朋	桂 太郎	明21. 4. 23	師団司令部条例等に付き来訪依頼	巻21- 1 △
	25	山県有朋	桂 太郎	明 . 4. 25	近衛編制に関して、猶熟考すべきよう依頼	巻21- 2 △
	26	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 19	政軍令之泛布について	巻21- 3 △
	27	山県有朋	桂 太郎	明23. 3. 17	イタリアにおける砲兵視察、砲工学校への留学	巻21- 4 △
	28	山県有朋	桂 太郎	明20. 3. 9	メッケル参内延期の相談	巻21- 5 △
	29	山県有朋	桂 太郎	明 . 3. 19	メッケルとの面談の件	巻22- 1 △
	30	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 3	齋藤幹へ来訪するよう伝言依頼	巻22- 2 △
	31	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 13	松陰神社の招魂社内への移転	巻22- 3 △
	32	山県有朋	桂 太郎	明 . 7. 15	来訪依頼	巻22- 4 △
	33	山県有朋	桂 太郎	明 . 7. 25	来訪依頼	巻22- 5 △
	34	山県有朋	桂 太郎	明 . 7. 26	来訪依頼	巻22- 6 △
	35	山県有朋	桂 太郎	明 . 8. 2	内訓云々	巻22- 7 △
	36	山県有朋	桂 太郎	明 . 9. 7	英国駐在公使川瀬より送附された図について	巻23- 1 △
	37	山県有朋	桂少将	明 . 9. 11	海岸砲間接射撃	巻23- 2 △
	38	山県有朋	桂少将	明 . 10. 17	来訪依頼	巻23- 3 △
	39	山県有朋	桂 太郎	明 . 10. 23	独逸公使面会に付き来訪依頼	巻23- 4 △
	40	山県有朋	桂 太郎	明 . 5. 4	教育第一二期の検閲の状況	巻23- 5 △

番号	差出人	受取人	日付	内 容	卷子	備考	
54	41	山県有朋	桂 太郎	明28.11. 8	見舞い状、東京の政情、白川宮薨去	巻24-1	△
	42	山県有朋	桂 太郎	明29.12.24	招待のお断り	巻24-2	△
	43	山県有朋	桂 太郎	明30. 8.17	乃木台湾総督との談論	巻24-3	△
	44	山県有朋	桂 太郎	明 . 7. 7	本部編纂課出仕加藤某	巻24-4	△
	45	山県有朋	桂 太郎	明31.10. 8	文官昇用規則改正	巻25-1	△
	46	山県有朋	桂 太郎	日付不明	川上操六への周旋のお礼	巻25-2	△
	47	山県有朋	桂 太郎	明31.10.24	尾崎文部大臣進退の事	巻25-3	△
	48	山県有朋	桂 太郎	明32. 3.26	川上参謀総長と清国に関する評議の有無に付き伺い	巻25-4	△
	49	山県有朋	桂 太郎	明32. 3.11	川上操六同伴で来訪依頼	巻26-1	△
	50	山県有朋	桂 太郎	明 . .24	疑問点に付き別付箋の上返送	巻26-2	△
	51	山県有朋	桂 太郎	明32. 4.28	川上操六の病気、福建省の事件	巻26-3	△
	52	山県有朋	桂 太郎	明33. 6.13	海軍大臣よりの内報	巻26-4	△
	53	山県有朋	桂 太郎	明33. 6.24	出兵に関する山本海軍大臣の意見書	巻26-5	△
	54	山県有朋	桂 太郎	明33. 6.30	清国への出兵増員	巻27-1	△
	55	山県有朋	桂 太郎	明33. 7.12	寺内正毅の清国派遣	巻27-2	△
	56	山県有朋	桂 太郎	明33. 7.30	青木外相との談議	巻27-3	△
	57	山県有朋	桂 太郎	明33. 7.31	伊国皇帝兇徒のため崩御	巻27-4	△
	58	山県有朋	桂 太郎	明32.12.14	西郷内相との談議	巻28-1	△
	59	山県有朋	桂 太郎	明32.12.27	陸相辞任	巻28-2	△
	60	山県有朋	桂 太郎	明31. 3. 5	高杉転任に付き小村との談合	巻28-3	△
	61	山県有朋	桂 太郎	明 . 6. 6	露国公使主催の午餐の招待	巻28-4	△
	62	山県有朋	桂 太郎	明 . 6.17	伊東顧問官との談合を失念	巻28-5	△
	63	山県有朋	桂 太郎	明 . 8. 7	暹羅公使に付き青木との談合	巻28-6	△
	64	山県有朋	桂 太郎	明 . 8.22	メール掲載記事の訳文送付	巻29-1	△
	65	山県有朋	桂 太郎	明 . 9. 2	談判の結果の問い合わせ	巻29-2	△
	66	山県有朋	桂 太郎	明32カ.9.14	平田より内願について	巻29-3	△
	67	山県有朋	桂 太郎	明 .10.20	今朝鈴木充美との面談の結果、内相への配慮	巻29-4	△
	68	山県有朋	桂 太郎	明 . 7. 9	誰か急速に派遣すべき云々	巻29-5	△
	69	山県有朋	桂 太郎	明 . 1.30	送別会の招待	巻30-1	△
	70	山県有朋	桂 太郎	明 . 3.18	軍制その他について島田三郎へ教示するよう依頼	巻30-2	△
	71	山県有朋	桂 太郎	明 . 8. 8	英仏独への回電	巻30-3	△
	72	山県有朋	桂 太郎	明13カ.8.11	福原報告書	巻30-4	△
	73	山県有朋	桂 太郎	明 . 9.15	昨日に関する再問	巻30-5	△
55	1	山口素臣	桂 太郎	明 . 5.11	軍隊の士気其他	巻31-1	――
	2	山口素臣	桂 太郎	明 . 6.12	金沢へ転任後の消息	巻31-2	――
56	1	渡邊洪基	桂 太郎	明 . 9. 5	預金返附、地誌編纂	――	――
57	1	渡邊千秋	桂 太郎	明44. 2. 4	紀元節発表の証書案	巻31-3	○
58	1	桂太郎カ	山県有朋カ	年月日不明	断簡（後缺）	巻18-6	△